
僕の名前はラリー。

りす君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の名前はラリー。

【Nコード】

N7782B

【作者名】

りす君

【あらすじ】

鹿島家のペットとして育てられた、犬のラリー。ラリーは今、重い病で命の際きわだった…。これは、過去に捨て犬だったラリーが命の親である今の家族、鹿島家と出会った時のお話。

僕の名前はラリー、オスで7才。

僕は、鹿島^{かしま}家の人達に飼われている犬だ。

もちろん、今こうやって言葉を喋^{しゃべ}って説明してるけど、人間には僕の喋りが、遠吠えや鳴き声にしか聴こえない。

今、とても暖かくて気持ちが良いけど何だか眠いんだ…。

今から5年前、僕は鹿島家の一員となった。

鹿島家の人達と出会う前まで、僕は前の飼い主から捨てられた捨て犬だった。

まだ幼くて小さな僕を、段ボールの中に入れて道路脇に置き去りにされた。

最初は、来る日も来る日も飼い主が戻ってくると信じて待ち続けた。

だけど…、飼い主は僕の前に現れなかった。

僕は、毎日淋しくて哭ないてばかりいた。

毎日、僕の前を走り去っていく幾つもの自動車。それを見る度にあの時を思い出しちゃって苦しかった…。

そんなある日の事。僕は、いつものように段ボールの中で前の景色を見ていた。

すると、一台の自動車が道路脇で止まった。

車から出てきたのは…紛れもなく、僕を捨てていった飼い主だった。

（僕を迎えに来てくれたんだ！）

そう思って、僕は嬉しくなってシッポを振り続けた。

飼い主は少しだけ僕の顔を見て、ポケットから何かの機械を取り出して、数秒間それを見て耳に近付けて喋り出した。

僕はその時、飼い主が何をやっているのか解らなかった。

それから少し経った後、一台の大きな自動車が道路脇に停車した。

車から2人出てきた。一人は、飼い主と何か話していてもう一人は僕に近付いて来た。

その人は僕を見て、

「お前：飼い主の事情で捨てられたなんて可哀想だな…。」
と言った後、僕を抱き抱えた。

僕は、怖くなってジタバタした。だけど、逃げられなかった。

飼い主が、もう一人の人との話しが終わると、僕の方を向いて悲しい目をして見つめた後、僕に向かってこないで乗っていた車へ戻っていった。

飼い主を乗せた車は、ゆっくりと僕から遠ざかっていった…。

「待って！僕を置いてかないでよ！」

必死の思いで吠えたけど、無駄だった。車は、僕から見えなくなっ
た。

僕は、悲しくて吠え続けた。

僕を抱え、2人が車に乗ろうとした時だった。

大きな車の前に、一台の車が止まった。

車から出てきたのは…、僕の今の飼い主である鹿島家の人達だった。

鹿島家のお父さんが僕を見てから2人に、

「すみません。この犬、私らで飼わせて頂けないでしょうか？」
と、言った。

2人は、お父さんを見て何か相談していた。

そして、僕は“保健所”っていう所に連れてかれ、数日間お医者さん達に見てもらった。

そして…、僕は鹿島家の飼い犬になったんだ。

今、僕は鹿島家の一員として生きている。

鹿島家の人達は、今でも僕を可愛がって優しく接してくれている。
それが、僕は嬉しいんだ！

捨てられた時はとても悲しかった。

でも今は…とっても幸せだ。

僕を育ててくれた鹿島家のみんな…

本当に…ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7782b/>

僕の名前はラリー。

2010年10月9日14時22分発行